

# 帆檣成林

—はんしょうせいりん—

新潟市歴史博物館  
博物館ニュース  
vol.23

## 「帆檣成林」とは？

帆柱が柱のように多く立つ様子を表した語。  
人が多く出入りする活気ある「みなと」を  
イメージしました。

## CONTENTS

特集1 旧小澤家住宅が開館しました P.2~3

特集2 発掘された日本列島2011 P.4

常設展示室から 黒船を描いたのや伝右衛門引き札(複製) P.5

おすすめの一冊 下級武士の米日記 桑名・柏崎の仕事と暮らし P.5

みなとびあ 研究notes 「新潟」の登場を考える PARTⅡ 一永禄年間の「新潟津」について P.6

館長日記 誘発地震 P.7

収蔵資料紹介 新潟朝顔会雑誌 自第巻号至第五号 秋狂園主人写 P.7

博物館を支えるモノ・もの 薄葉紙 P.8



旧小澤家住宅の新座敷土縁ガラス戸

新潟市歴史博物館  
博物館ニュース

帆檣成林

Vol.23

## 【たいけんのひろばプログラム】楽しみながら、遊びながら、昔のことを学びます。

日時	タイトル	内容	申し込み・対象・参加費
8月27日(土)・28日(日) 13:00~15:00 (2日目は16:00まで)	“発掘された日本列島2011”展関連プログラム 2日で完成!土器づくり!(*1)	粘土を用いて土器をつくり、焼いて完成させるまでを2日間で行います。	必要(8/18必着) 20名・無料
9月3日(土) 14:00~15:30	ワラのくらし体験!	ワラの加工準備やワラ布団作りをしながら、ワラを利用してきた生活文化に触れます。	必要(8/24必着) 10名・無料
9月11日(日) 14:00~16:00	小中学生のための (市山流)はじめての日本舞踊(*2)	日本舞踊の基本を体験しながら、畳の生活文化に親しみましょう。(講師:市山七十世先生)	必要(8/31必着) 小中学生15名・無料
9月24日(土) 14:00~16:00	和本づくり体験	むかしの本づくりを実際にやってみましょう。	必要(9/14必着) 15名・200円

お申込みは、電子メール・往復はがきで当館まで。プログラムは予定となっています。詳細は、当館までお問い合わせください。

(\*1) 2日連続のプログラムです。2日目は、大江山公園が会場となります。

(\*2) 会場は、みなとびあ 旧第四銀行住吉町支店内の日本間となります。普段着で結構です。

現在  
開催中  
企画展

## 「発掘された日本列島2011」展

全国の発掘調査成果を出土品とともにいち早く公開する、全国5か所の巡回展です。全国的に注目された埋蔵文化財を展示するとともに、関連して新潟市内の遺跡を紹介する地域展を同時開催しています。

【観覧料】	個人	団体	*中学生・小学生は 土日・祝日無料 *企画展示観覧券で 常設展示もご覧 いただけます。
一般	600円	480円	
大学・高校生	400円	320円	
中学・小学生	200円	160円	

【会期】2011年8月9日(火)~9月11日(日)【休館日】8月22日(月)、29(月)、9月5日(月)

関連イベント

① 記念シンポジウム	② 記念講演会	③ 関連体験イベント
<b>8月21日(日) 10:00~15:30</b> <b>「遺跡からさぐる新潟の原点」</b> ~新潟の低湿地は歴史の宝庫~ 基調報告:坂井 秀弥氏 (奈良大学教授) 発表:石川 日出志氏 (明治大学教授) 橋本 博文氏 (新潟大学教授) 小林 昌二 (新潟市歴史博物館館長) 会場: NEXT21 6階市民プラザ 申込: 不要(定員400人) 入場無料	<b>9月4日(日) 13:30~15:00</b> <b>「発掘された日本列島」</b> 今回のみどころ 講師: 林 正憲氏 (文化庁文化財調査官) 会場: 新潟市歴史博物館 2階セミナー室 申込: 必要 (8月25日(木)締切・必着 定員90人) *申込方法 氏名・住所・連絡先電話番号と希望イベント名を明記し、電子メール・FAX・往復ハガキのいずれかで、締切までに当館までお申し込みください。締切後にご通知します。	<b>第1回「古代の製鉄に学ぶ」砂鉄から鉄をつくる!</b> <b>8月14日(日) 10:00~12:00</b> 会場: 新潟市歴史博物館 芝生広場 *見学は自由 申込: 必要(8月4日(木)締切・必着 定員10人) <b>第2回「2日で完成!土器づくり!」</b> <b>8月27日・28日(土・日)</b> 1日目: 土器の形をつくる 8月27日(土) 13:00~15:00 会場: たいけんの広場 2日目: 土器を焼く 8月28日(日) 13:00~16:00 会場: 大江山公園 申込: 必要(8月18日(木)締切・必着 定員20人)

**展示解説会** 毎週日曜日 14:00~(40分程度)  
 申込不要(企画展観覧券が必要です)  
 時間までに企画展示室へお集まりください。

**地域展** 「海拔0m以下から発見される遺跡」  
 会期: 7月23日(土)~9月11日(日) 観覧無料  
 会場: 新潟市歴史博物館 旧新潟祝園庁舎内 主催: 新潟市歴史博物館

博物館  
講座

当館学芸員が調査・研究をすすめているテーマを、  
毎月第4日曜日にお話します。  
時間: 13:30~15:00 会場: 本館2階セミナー室  
申込: 当日受付、先着50人 資料代: 100円

- 8月の講座: 8月28日(日)  
蒲原平野の開墾技術 講師: 岩野 邦康
- 9月の講座: 9月25日(日)  
検証!新潟の遺跡の保存と活用 講師: 小林 隆幸
- 10月の講座: 10月23日(日)  
新潟の美術—物産陳列所の美術展— 講師: 木村 一貫

■ 帆檣成林「はんしょうせいりん」第23号  
 ■ 発行日 平成23年8月19日  
 ■ 編集発行/新潟市歴史博物館 〒951-8013 新潟市中央区柳島町2-10  
 ■ 印刷/株式会社博進堂

## 博物館を支えるモノ・もの 薄葉紙

薄葉紙は大変薄い紙で、表面がなめらかな仕上げになっています。博物館で使う梱包材の一つで、保存や輸送の際に資料を保護するのに使います。漆器を包んで傷がつかないようにしたり、屏風をたたむ時に本紙の間に挟んで顔料がこすれ合って取れないようにしたりします。他にも、やわらかく丸めると緩衝材になりますし、帯状に切って軽く扱くと華奢な資料をやさしく固定する紐になります。綿を包むと土器や工芸品の当て物になる等、大変用途の広い道具です。博物館資料の保存に欠かすことのできないモノです。



次回  
企画展

## 第8回 むかしのくらし展 「今日は何を着よう? ~着るものいまむかし~」

文明開化から現代にいたるまで、大きく変化した衣服について紹介し、その変化を通して社会の移り変わりを考えます。

【会期】2011年9月23日(金・祝)~12月18日(日)  
 【休館日】9月26日(月)、10月3日(月)、11日(火)、17日(月)、24日(月)、31日(月)、11月4日(金)、7日(月)、14日(月)、21日(月)、24日(木)、28日(月)、12月5日(月)、12日(月)

【観覧料】無料

## 編集後記

「帆檣成林」23号はいかがでしたでしょうか。本号の特集では、7月2日に開館した旧小澤家住宅と、みなとびあで新たに始まる企画展について取り上げました。新潟市文化財にも指定されている旧小澤家住宅は、みなとびあから歩いて10分ほどのところにあり、町屋の趣さと、新潟を代表する商家の歴史を感じることができます。また当館で8月9日から開催されている「発掘された日本列島2011」展では、全国の発掘出土品のなかから注目すべき資料が一堂に会しています。さらに敷地内にある祝園庁舎では、地域展として「海拔0m以下から発見される遺跡」も開催中です。みなとびあでは、他にもいろいろな体験プログラムが行われています。節電の影響もあり今年も厳しい夏になりそうですが、暑さに負けず、ぜひ遊びに来てください。(並木)

## お問い合わせ・申込みは博物館まで...

### 新潟市歴史博物館みなとびあ

住所: 〒951-8013 新潟市中央区柳島町2-10  
 TEL: 025-225-6111 E-MAIL: museum@nchm.jp  
 休館日: 毎週月曜日、祝日の翌日 開館時間: 9:30~18:00



# 旧小澤家住宅が開館しました

新潟市歴史博物館副館長 伊東 祐之



外観

「北前船の時代館 新潟市文化財 旧小澤家住宅」（少々長いのでこの後は「旧小澤家」と略します）がついに開館しました。「旧小澤家」は、みなとびあ新潟市歴史博物館と同じく財団法人新潟市芸術文化振興財団が指定管理を受けました。財団では、みなとびあとしての一体的な管理運営をすることによって「旧小澤家」をより有効に保存・活用することとしました。本特集では、その概要と魅力についてお知らせします。

「旧小澤家」は、江戸時代以来、商家として活躍してきた小澤家の店舗付き住宅です。屋敷は廻船問屋や大商人が軒を連ねてきた上大川前通に面し、思案小路と茂作小路に挟まれています。小澤家は、江戸時代後期から思案小路角で在宿をしていました。在宿とは、農民に宿を提供して米の販売を仲介する仕事です。明治になって廻船の船主になって全国の商品を買い、新潟で廻船の商売を仲介する廻船問屋業も始めました。さらに港の荷役を担当する会社を興すなど新潟港と深いかわりをもつて成長してきました。この間に屋敷地を広げて、明治四十年代には現



受付・情報案内所



通り土間

在の敷地となりました。建物は、明治十三年の大火で焼け残った道具蔵に、直後に再建された主屋、さらに奥座敷、衣裳蔵、新座敷、家財蔵が明治期を通じて建て増しされ、明治末には庭園もつくられました。間口の広い店舗と敷地を囲む板塀は、湊町新潟を象徴する景観となっていました。

平成十四年、この敷地と建物が当主の小澤辰男氏から新潟市に寄贈されました。平成十八年、新潟市教育委員会は、新潟町の町家の典型であり、豪商の屋敷構えがほぼ残っている貴重なも

ました。また、八月三日からは新潟まつりにちなんだ「湊祭・住吉祭・商工祭」を道具蔵で展示しました。これらの展示は、おかげさまで好評をいただいています。今後も湊町新潟や下町、あるいは季節に関わるような展示を、道具蔵を中心に開催する予定です。小さな展示ですが、新潟を感じられる、ほのぼのとできるような空間としたいと考えています。

こうした「旧小澤家」の魅力はみなさんに伝えてくださるのは、ボランティアスタッフのみなさんです。新潟の歴史を、下町を、「旧小澤家」をみなさんに知ってもらいたい、五十人ほどの方々が張り切っておられます。「旧小澤家」を楽しむだけでなく、ボランティアスタッフのみなさんと出会い、会話を通じて、彼らの熱意や地元愛を感じ取っていただければと思います。

また、「旧小澤家」は魅力あふれる下町の玄関口でもあります。人情あふれる下本町通りの市場は「旧小澤家」のすぐ裏です。海に向かえば、海岸よりの砂丘地から信濃川沿いまで、日和山・開運稲荷・湊稲荷・みなとびあなどの町歩きスポットが並んでいます。ふらりと知らない小路へ迷い込んで新しい発見をするのも下町の楽しみ方です。「旧小澤家」では魅力あふれる下町に関する情報も提供しています。

みなさんが「旧小澤家」を何度も訪れ、ご利用いただくことによって、その魅力は引き出されていきます。そし



道具蔵での屏風展示



新座敷からの庭の眺め



ボランティアによる案内

**問い合わせ**  
 「北前船の時代館 新潟市文化財 旧小澤家住宅」  
 住所：新潟市中央区上大川前通十二番町 2733番地  
 電話：025-222-0300  
 ファクス：025-222-0301  
<http://www.nchm.jp/ozawake>  
 e-mail: ozawake@nchm.jp



て、みなさんの力や想いを受けて、わたしたちは魅力あふれる新潟の歴史を表す建物として、「旧小澤家」を保存・活用していきたいと思えます。

（いとう すけゆき 副館長）

# 発掘された日本列島21011

小林 隆幸

みなとびあでは、八月九日(火)から九月十一日(日)までの会期で、「発掘された日本列島21011」展を開催しています。

「発掘された日本列島21011」展は、全国で行われている年間八千件ほどの発掘調査の成果を、いち早く、分かりやすく伝えるための展覧会です。文化庁が主体となって企画し、協力団体や会場となる開催館とともに実施しています。例年、全国数か所の会場を巡回しています。

今年度の「発掘された日本列島21011」展は、全国二十一遺跡から五百点を超える資料を集め、全国五会場で開催されます。東京都の江戸東京博物館を皮切りに、新潟市歴史博物館、静岡市登呂博物館、九州歴史博物館、高知県立歴史民俗

資料館の順で全国を巡ります。新潟市内での開催は初めてで、考古学ファンのみならず、新潟市民や県民にとって、全国の発掘成果に直に触れることができる絶好の機会となります。

今年三月十一日の東北地方を中心とする多くの被害をもたらした東日本大震災は、戦後の日本人が経験したことのない未曾有の大惨事となりました。原発事故の収束も不透明で、原発を抱える福島県民が不安な生活を送っていることに私たちも胸を痛めます。そうした状況で、福島県の二遺跡から出品していることは喜ばしいことです。なかでも古代の製鉄遺跡である史跡横大遺跡は原発に近い南相馬市に所在します。今回の資料も地震で混乱した状況にもかかわらず、

地元担当者の努力により出展にこぎ着けたと聞いています。居並ぶ資料の背景には、発掘調査、資料の整理・保管、資料の価値を見出し展示品とする地元担当者・関係者の努力があることをあらためて感じさせられます。

今回紹介される遺跡は、二万八千年前の旧石器時代から平成まで、北は青森県から南は鹿児島県までの範囲に及びます。新潟県からも佐渡金銀山遺跡と糸魚川市の山岸遺跡が登場します。どれも話題となった遺跡だけに、見逃せない資料が並びます。いくつかの例をあげてみましょう。

滋賀県相谷熊原遺跡の土偶は、約三千年前の縄文時代草創期後半にさかのぼる最古級の土偶です。簡略化された形ながら女性の姿をはっきりとたたどっています。女性を象徴する土偶作りのルールが、以後、一万年に渡って受け継がれてきたことにはあらためて驚かされます。

愛知県の一色青海遺跡からは弥生時代中期のシカの絵画土器が出品されています。高さ九センチメートル程の小さな土器の破片に、シカが縦に並んで描かれています。シカの描かれ方を一頭ずつ観察するのも楽しいでしょう。

奈良県の四条古墳群からは、形象埴輪や、鳥や笠の形をした木製品が出品されています。形象埴輪の中でも力土形の埴輪はユニークです。また鳥形木製品は、

まさに鳥が滑空しているような躍動的な姿をしています。

新潟県からは、山岸遺跡の資料が出品されました。山岸遺跡は、姫川右岸の小さな谷に位置する中世の屋敷跡です。出土した長柄の銚子(柄の付いた酒を注ぐ容器)の破片に傘の文様が細工してあることなどから、傘の紋を家紋としていた名越氏に因連する人物の邸宅ではないかと考えられています。名越氏は鎌倉幕府の執権を務めた北条一門に連なる家柄です。全国各地の資料が並ぶ中、日本史の視点から地元新潟の歴史を捉えなおしてみるのが新潟開催の醍醐味でしょう。

全国を巡回する全国展のほかに、開催地をテーマにした地域展も同時開催します。当館では、新潟平野の特徴を踏まえ、「海拔0m以下から発見される遺跡」展として、全国展に先行して七月二十三日(土)から開催しています。海面より低い土地は、生活の場として適しているとはいえません。しかし新潟平野では、かつての人々の暮らしの痕跡である遺跡が、海面より低い地中深くから見つかることがよくあります。それはなぜなのか?その理由を紹介し、実際に海拔0m以下で見つかった遺跡のいくつかを紹介いたします。

この夏、ぜひ、みなとびあへ足をお運びください。  
(こばやし たかゆき 学芸員)



土偶(相谷熊原遺跡)



鳥形木製品ほか(四条古墳群)

## 常設展示室から 黒船を描いたのとや伝右衛門引き札(複製)

引き札とは、店や商品の宣伝ちらしのことです。この引き札は、新潟の商人宿「のとや」のもので、原本は柏崎の黒船館が所蔵しています。左に記された「新潟湊雲林堂池仁」というのが引き札を作った人でしょう。店を説明した部分には「諸国商人定宿〇八のとや伝右衛門」と中央にあり、右には「越後新かた古三之町東側橋より下へ三軒目」とあります。現在の古町演芸場の向いあたりです。左には北蒲原へ船便を出していることを売り物にして、再来店を乞う文が書かれています。



図1 「のとや」引き札

しかし、引き札の図柄は、「のとや」とは全く関係ありません。また、この説明文は図柄と比べると少し傾いていて、版木の縁のような線も見えます。つまり、この部分は後で刷り足したもののようです。

図柄は黒船と外国の銃を捧げ持った兵士です。「頃ハ安政六年未四月二十二日七ツ時ヲロシア舟渡来ス、舟長サ三十間余、はば十五間余、同廿三日ヲランダ舟渡来ス、舟長サ四十五間余、はば十九間余」と説明してあります。

1858(安政5)年に幕府は5か国と修好通商条約を締結します。その中で開港場となった新潟を調査するために、翌年4月にロシアのジキッド号とオランダのパーリー号が相次いで訪れます。つまり、新潟へ最初に訪れた異国船ジキッド号の来航を伝えるかわら版です。かわら版に店の名を刷り足して引き札にしたのでしょうか。

では、この図柄は雲林堂がジキッド号や乗組員を見て一から描いたのでしょうか。実はこの図柄はオリジナルではありません。1854(嘉永7)年にペリーが神奈川沖へ再来航した際に発行されたかわら版の図柄を写し取ったものです。船首や船尾の装備、船員の配置や旗の柄、小舟の様子など、よく見ると簡略化されていたり、現実に合わせて直されたりしていますが、明らかにこのかわら版をもとに作られています。

初めての異国船到来という大騒ぎに、雲林堂はかつて入手したかわら版を持ち出して急ぎ版を作ったのでしょうか。このかわら版に店の名が刷り込まれ、かわら版を兼ねた引き札として、泊客や得意先に配布されたのでしょうか。幕末新潟の喧噪を想像させる資料です。

伊東 祐之(いとう すけゆき 副館長)



図2 ペリー来航を伝えるかわら版(「図説黒船の時代」(財団法人黒船館編 河出書房新社発行)所収)

### おすすめの1冊

下級武士の米日記  
桑名・柏崎の仕事と暮らして

江戸時代後期、柏崎は、伊勢(現・三重県)桑名藩の松平氏が飛地領として治めていました。

天保十年(一八三九)、国元の桑名から柏崎の陣屋へ派遣され、年貢米の徴収にたずさわった下級武士・渡部勝之助と、彼の養父であり、桑名で藩の米蔵の出庫係をつとめた渡部平大夫。ともに「米」にかかわる仕事に従事した下級藩士の父子は、百余里はなれた、それぞれの任地で『柏崎日記』と『桑名日記』をしるし、交わりました。

約九年の歳月にわたって綴られたふたつの日記は、はなれた家族の近況をたがいに知らせあうものでした。そしていま、時代をこえた日記は、私たちに当時の武士のいなみや、柏崎・桑名の生活文化を子細にわたり伝えています。

本書は、ぼつ大な情報量をもつ、この両日記を丹念に読みとぎ、藩財政のひっ迫とともに困難をきわめた下役人の「米」にかかわる業務の実態をはじめ、子育て、食事、やま、折々の行事、旅など、けっして裕福ではないなか、家族とともに、たくましく生きた武士の日常をリアルに描いています。ぜひ、ご一読ください。

(安宅俊介 学芸員)



加藤淳子(著)  
2011年6月16日発行  
平凡社

# 「新潟」の登場を考える PART II

## 「永禄年間」の「新潟津」について

長谷川 伸

「帆橋成林」第十七号で述べたように、文献史料上の「新潟」という地名の初見は、高野山清浄心院所蔵の「越後過去名簿」の登場により、永正十七(一五二〇)年に遡りました。ところが、近年のある仏像の調査と再評価により、戦国時代の「新潟津」について新たな事実が発見されました。

魚沼市(旧北魚沼郡堀之内町)の真言宗大悲山弘誓寺には、木造の不動明王坐像があります(写真1)。

これは本尊聖観世音菩薩像の脇侍として安置されていますが、もともとは客殿の本尊でした。寄木造りの像高が六〇cm位の像で、何度かの火災をくぐり抜け、左目が焼け爛れています。この両脚部の底部を調査したところ、「越後国蒲原郡平嶋之郷新潟津不動院之御本尊仁奉造立之、本地愚僧蒲原所生之者也、事聞而成望、権大僧都法印教印奉造作之、



写真1「不動明王坐像(正面)」



写真2「不動明王坐像 底部墨書」

(中略)：永禄九年」という墨書の存在が確認されたのです(写真2)。この不動明王坐像は蒲原生まれの「権大僧都法印教印」が発願し、中略部分の記載から、仏師は運慶流から派生した京都七条流の康西であることがわかりました。これは紛れもなく戦国時代の「新潟津」を考える上で重要な発見であるといえるでしょう。

この寺院は「越後過去名簿」において、「新潟」の住民の供養の取次役として、既に天文九(一五四〇)〜四二(一五七五)年頃に登場していました。各種の由緒では、開基は不明、かつては醍醐寺報恩院流の末寺であり、天文(永禄年間)に教印の中興と伝えられてきました。坐像底部の墨書により、「教印」という僧が実在したことが明らかになりました。

林所(真言宗の地方学問道場)となりました。しかし、どうしてこの不動明王坐像が弘誓寺にあるのかについては、よくわかっていません。そこで改めて「永禄九年」「平嶋之郷新潟津不動院」とある墨書を考えてみましょう。永禄九(一五六六)年段階では、平嶋郷の中に新潟津があるということになります。現在平嶋(西区)は信濃川の本流と分水路西川の合流地点付近に位置し、周辺には川越の波切り名号や焼鮎伝説といった親鸞七不思議伝説の故地、信濃川の対岸には逆さ竹の西方寺や親鸞・蓮如の来訪伝説のある鳥屋野浄光寺があります。天正八(一五八〇)年上杉景勝は「平嶋之関」に代官を任命し管理していますが、これらから平嶋は中世期の信濃川の渡し場であった可能性があります。つまり、信濃川渡河点と信濃川左岸の自然堤防上を行く北国街道との結節点に位置し、砂丘列の発達・安定化により町場が形成された平嶋を中心とする「平嶋之郷」の中に、戦国時代の「新潟津」が存在したと考えられるのではないのでしょうか。

一方、弘誓寺は縁起によれば長和五(一〇二二)年の創建で醍醐寺派に属し、観音信仰の霊場として信仰を集めました。室町幕府三代将軍足利義満の庇護により、一時荒廃した観音堂が再建され、十二坊の塔頭、末寺十五ヶ寺を要する大寺院となりました。ところが、戦国期には戦乱に巻き込まれ、天正十九(一五九二)年の観音堂への落雷で炎上し、多くの什物が焼滅しました。弘誓寺が復興したのは延宝五(一六七七)年頃で、近世期には京都智積院の末寺に属し、常法談

このように、文化財の新たな評価などから、中世の「新潟」の登場を考える謎解きは、新たな研究段階に入ったといえるでしょう。(はせがわ しん 学芸員)

### 誘発地震

新潟市歴史博物館 館長 小林 昌二

三月十一日午後二時四十六分、マグニチュード九・〇の超巨大地震(東北地方太平洋沖地震)が長く激しい揺れで東日本全域を襲い、直後の午後三時八分、岩手県沖を震源に七・四、午後三時十五分に茨城県沖で七・七、午後三時二十五分に宮城県沖で七・五と、立て続けに震源域内で余震が勃発しました。西区の自宅にいた私は、すぐにテレビに見入り、人や車や建物を襲う巨大津波の映像を、息をのんで見守るばかりで、余震の記憶はどうも定かではありません。

うようよになりました。はたせるかな、六月になって一般向けの地震専門書「超巨大地震に迫る」日本列島で何が起きているのか」(NHK出版新書六月十日刊)を読んだ、それが「誘発地震」と言われるものであることを初めて知った次第です。著者は、地震研究の最前線にある東京大学地震研究所の大木聖子さん、纏綿一起さんのお二人の先生ですが、「あとがきにかえて」の「本書の印税は、すべてあしなが育英会の震災遺児に寄付」とあることに心打されました。また第五章「防災に正しく恐れろ」は、国民必読と思われ、私は超ミリオンセラーになることを願っているところです。

夕刻に電話が通じ、副館長から入館者も職員も、また館も無事とのこと、まずは休心し、明朝まで余震や津波警報に注意しながら、事態を見守ることにしました。

そして貞観の地震堆積物の調査が、三陸海岸や茨城県太平洋岸には及んでおらず、未完の状態にあり、こうした過去の歴史的地震データを網羅的に収集することが、地震の長期的評価のために大事だ(一三五頁)と述べています。こうした歴史に学び研究すべきだという提言の意義を深く考えてみたいものです。

## 館長日記

地震で余震の激しさを分かったつもりでしたが、今回は震源から遠く離れた所で、どうして大きな地震が起きるのかと疑問に思



本震発生から1ヶ月間の地震活動(点線は震源域を示す) [出典:「超巨大地震に迫る」日本列島で何が起きているのか」第3章 引き起こされたさまざまな現象」(90頁 図3-3) (NHK出版発行 2011年6月10日)]

### 収蔵資料紹介

#### 『新潟朝顔会雑誌 自第壹号至第五号 秋莊園主人写』 明治四十一年頃

アサガオを描いた資料をご紹介します。とはいえ、この奇妙な植物の絵、あまりアサガオらしく見えないかも知れません。これは、明治から大正にかけて活動した「新潟朝顔会」の会誌を、秋莊園という人が手書きで写しとった資料です。新潟朝顔会は、アサガオを栽培して鑑賞する同好会でしたが、大輪を咲かすことではなく、「変化朝顔」といわれる突然変異系のアサガオを交配させ、風変わりな花や葉をつくることを楽しんだ会でした。現在では遺伝のメカニズムが明らかになっていますが、当時その栽培法は専門家の奥義とされ、妖しい魅力にひかれたマニアたちが種や情報を交換しあっていたのです。



アサガオの奇花を珍重する趣味は、江戸時代の文化文政期に始まり、嘉永安政期に第二次ブームが起こったと伝えられています。いずれも江戸や大坂が中心でした。明治に入ると、二十六年に東京の積久会が変化朝顔の品評会を開き、会誌も発行したことでブームは地方にも飛び火し、明治四十一年までに大阪、名古屋、新潟、仙台などでもアサガオの会が生まれました。新潟では、明治三十年に新潟朝顔会の前身である「新潟朝顔同好会」が発足します。その普及を早めた中心的な人物が、近藤鑑之助でした。濁川の地主だった近藤は、明治十八年

食えもせず飯の種にもなりそうにない変化朝顔を、近藤は「只自己の楽みに過ぎない」と自嘲ぎみに語りまします。それでも新潟朝顔会は、大正九年まで毎年展覧会を開きました。会場は、県物産陳列所の貸し室。新潟の近代化を駆り立てた産業の磁場の片隅で、園芸とも芸術とも定めがたい珍妙なアサガオの趣味世界が、花を咲かせていたのです。

(木村一貫 学芸員)